

I. 公開講演会 「高大を接続する」 —米国と日本の高大接続の現在と未来—

名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センターは1999年に設立された中等教育研究センターを発展的に解消し、2015年5月に新たに開設された。そして、標記公開講演会を2015年12月5日に開催した。国内外から登壇者を招き、北海道から九州までの大学教職員、県内外の高校教職員、附属中・高等学校保護者、塾関係者、マスコミ関係者等、約120名の参加があった。本稿はその記録である。

1. 講演「高大非接続の現状—序にかえて—」

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

附属高大接続研究センター長

大谷 尚

2. 講演「米国における高大接続の現状と課題」

(1) 「米国の大学の立場から」

元マサチューセッツ大学副総長

アンドリュー・エフラット

(2) 「米国の中等教育・特別支援教育の立場から」

元マサチューセッツ大学教育学部Senior Lecturer

ノーラ・スティープン

3. 講演「日本の高大接続の現状と将来」

北星学園大学経済学部教授・北海道大学名誉教授

佐々木 隆生

1. 講演「高大非接続の現状—序にかえて」

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授・附属高大接続研究センター長 大谷 尚

高大接続をめぐる政府・文科省の動き

- ・ 2012(平成24)年8月28日
 - 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、高等教育の質保証・大学入学者選抜の改善・大学教育の質的転換を、高等学校と大学のそれぞれが責任をもちつつ、連携しながら同時に進めることが必要であると提言
 - 「大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について」を文科大臣が諮問
- ・ 2012(平成24)年9月
 - 中央教育審議会の中に高大接続特別部会を設置
- ・ 2013(平成25)年10月
 - 教育再生実行会議第四次提言(「高等学校と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」)
- ・ 2014(平成26)年03月25日
 - 中央教育審議会高大接続特別部会 審議経過報告(平成26年3月25日 高大接続特別部会)
- ・ 2014(平成26)年12月22日
 - 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)(中教審第177号)
- ・ 2015(平成27)年01月16日
 - 高大接続改革実行プランについて → 次ページ
- ・ 2015(平成27)年3月5日
 - 高大接続システム改革会議

高大接続をめぐる政府・文部科学省の動きですが、2014年の12月に高大接続部会の答申が出て、2015年の1月に改革実行プランが出ました。そして、3月に接続システム改革会議ができ、9月に中間まとめを発表しました。つまり、2015年時点で中学校1年生の子が高2になったところで共通の学力テストを受け、高3のところはもう現在のセンター試験が廃止されて、新たな高大接続テストと呼ばれるものを受けることになるということです。

こういう状況の中で、今、何が問題であって、何が求められているのかということです。私は以前、名古屋大学教育学部附属中・高等学校（以下、附属学校）の校長をしていました。それから、今日ここに高校関係の方がたくさん参加されています。いくつかの大手予備校からも来ておられますので、中等教育の立場から少し話をしたいと思います。私が附属学校の校長になった最初の年に、浜松で東海地区普通科高等学校長会がありました。そこで非常に興味深い体験を1つしたのです。

高校教育と大学教育のギャップ

そこでは、いくつかの発表があって、最後の発表が高大接続テストに関するものだったのです。ちょうど2010年で、2008年から2011年の文部科学省大学改革推進委託事業「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究」の真最中だったときです。その代表が、今日お話しいただく佐々木先生ですが、そのころ、そういったことを調べて、普通科校長会ですから普通科の校長の先生方に発表されたのが、最後の発表でした。

発表なさったのは、その前年度まで高等学校の校長を務めていらした先生です。その年から大学で教えていらっしゃるとおっしゃっていました。その先生が、ご自身の発表の冒頭におっしゃった言葉が、大変興味深かったのです。「私は、昨年までずっと高校で教えていて、今年から大学で教えるようになりました。しかし大学で教えるようになって気づいたことがあります。それは、自分が昨年まで高校で教えていたことが、全く間違っていたということです」。

これは、高校が生徒のためにとやってやっていることを、今まではその子を送り出す側で見ていたわけですが、受け入れる大学側の立場で見てみると、何にもなっていない。あるいは、かえって害毒にさえなっているというふうな深い気づきを得られたのだと思うのです。深く衝撃的な気づき。それを、非常に誠実に、かつ勇気を持っておっしゃった表現だと、私は受け止めました。この先生は、そういうご自分の深い気づきに基づいて、高大接続テストのことを調べ始めて、そこで発表なさったというわけです。

異なるタイプの羞恥心の獲得

もう1つ、私の体験をお話いたします。名古屋大学の初年次科目「基礎セミナー」というのがあります。一般教養的な大きなクラスでやる講義主体の授業ではなくて、最大12名の定員の少人数でゼミナールです。そういうものが名古屋大学にあるのですが、それを「基礎セミナー」といいます。それを担当したときのことです。

私は、理系学部のその授業を担当したのですが、そこで、一年生である学生の多くがインターネットからコピペしたレポートを出すのです。大体はウィキペディアなのですが、しかも、コピペした部分が「だ・である調」で、自分が書いた部分が「ですます調」であって、文がつながら

なくても構わないのです。平気でやるのです。それで著作権法とか、「参考」「参照」「引用」はどう違うか、それから、「公正な引用の慣行」とは何なのかを表に示して、何度も詳しく教えるのですが、一向に直らない。常にコピーをしってくるのですね。

これだけ教えているのに、どうして彼らはコピーをし続けるのかと、半期の授業の間、ずっと考えていましたが答えは得られませんでした。

附属高校では、学校から認められた者は、大学1年生の授業に出られるという制度がありまして、その授業には附属の高校生が1人出ていました。その高校生とやりとりをしまして、ある答えを得ました。

その高校生は、こう言いました。「先生、コピーのことですけど、僕のレポートは問題ないですよ」。私は「ああ、君のレポートは問題ないよ。むしろ大学生のお手本になるような、優れたレポートだ」と言いました。彼のレポートは、本当に優れていたのです。そうしたら、彼がこう言いました。「そうですよね。ああいうことは、僕にはとても恥ずかしくてできません」。

それで私は疑問が一挙に解消したのです。なぜインターネットからレポートにコピーをしても平気なのか、どうしてそういうことをするのかということをずっと考えていたのですが、なぜするのかということを問うていても、答えは得られなかったのです。つまり、問うべきことは、それをしない人は、なぜしないのかだったのです。そしてその答えは、恥ずかしいからです。する人には、知的な恥ずかしいという感覚、知的な羞恥心というのが育っていないのだということに、私は気がついたのです。

このことは、幼児と似ていると思うのです。どんなに止めても裸で道に出してしまうとか表に出してしまう幼児と似ている。親が、「そんなことすると恥ずかしいよ」と言うと、余計面白がつてやる。それから、あえて下品なことを大声で言う幼児にも似ています。幼稚園児が3人歩いていて、後ろからお母さんが何人か歩いてくる。その幼稚園児3人が、「うんち、おしっこ、おならー。うんち、おしっこ、おならー」と言いながら歩いています。後ろから来るお母さんたちは恥ずかしそうな顔をしているけれども、恥ずかしそうな顔をすればするほど、子どもはやりますよね。

これはどうなのかというと、私の考えでは、どんなに駄目だと言っても、恥ずかしいという気持ちが芽生えるまでやめない。私は、これと似ていると思うのです。ただ、大学生と幼児とは完全に違う点がある。それは、この幼児にはいずれ羞恥心が育って、その行動をやめる。大人になって「うんち、おしっこ、おならー」と言いながら歩いている人はいないですから。だけど、コピーをしても平気な大学生には、たぶん羞恥心は今から育たないだろうと思うのです。

なぜかという、幼児は、羞恥心が育つ「臨界期」の前にいるけれども、大人はその臨界期の後にいる。臨界期というのは、特に言語の習得などでいわれていて、いまだに臨界期仮説ともいわれ、本当にあるのかなのかということがいろいろ研究されていますが、例えば、絶対音感などは完全にあるわけで、3歳から7歳ぐらいの間でないと絶対音感はないといわれています。その前でも駄目、後でも駄目。同様に、こういう知的な羞恥心は、もう育たないのではないかと、私は思っています。

それとともに、彼らには、まじめにやったら恥ずかしいという気持ちもあるのかもしれませんが。では、なぜ、コピーしたら恥ずかしいという羞恥心ではなくて、真面目にやったら恥ずかしいという羞恥心を獲得してしまったのか。つまり、昔の大学生や今の附属高校の生徒のように、コピー

ぺは恥ずかしいと思う人と、この授業の1年生のように恥ずかしくないと思う人がいるのはなぜかということなのですが、こんな本を読んだのを思い出したのです。『羞恥心はどこへ消えた?』。

これは2005年ごろの本ですが、当時、ジベタリアンというのがはやっていて、駅や階段なんかで地面に座ってしまう若者ですね。彼らはどうして恥ずかしくないのかということを徹底的に追究した本なのですが、最終的な答えは、「彼らは立っているほうが恥ずかしいのだ」というのです。真面目にきちんと立っていることは、ウザイ、ダサイ、仲間内から見ても恥ずかしいこと。だから、座ってしまう。そのほうが恥ずかしくないのだというわけです。だから、彼らには羞恥心がないのではない。われわれとは異なるタイプの羞恥心を持っているのだということです。

そういうふうにと考えると、コピペしても恥ずかしくない学生というのは、単に恥ずかしくないから野放図にやっているというだけではなくて、むしろ、きちんと考えて自分で調べて書くというほうが、たぶん恥ずかしいことなのではないかと考える必要もあるのではないかと思います。

高校教育と大学入試テスト、その影響

では、何が彼らをそう育ててきたのか。名古屋大学に入っているのですから、学力的には非常に高い子なのですが、ひょっとしたら、学力と引き換えに大切なものを悪魔に売り渡してしまったのではないかと思います。そうだとしたら、現在の高校教育全体を眺めていく必要があるだろうということで、高校教育を振り返って眺めたいのですが、現在の高校教育を規定しているものは、大学入試だと思うのです。大学入試が高校教育の目的となってしまう。大学入試合格の実績で、いわゆるトップ校から、底辺校まで序列化されています。この序列こそが、「焚き付けと冷却のテクノロジー」と京都大学の竹内洋先生という社会学の先生が呼んでいるものを成立させているわけです。

「A大学は入れないから、お前らは頑張って望む必要はない。ただ、B大学には絶対合格しろよ」というようなこと。あるいは、「C高校には到底かなわないけれども、D高校にだけは負けるなよ」というような、焚き付けつつ冷却する。そのテクノロジーを成立させているのは、この序列ですね。この序列の中で、進学者にとっても、就職者にとっても、ひずんだ高校教育がなされているのだと思います。先ほどのコピペをする学生は、その犠牲者だと考える必要があるのではないかと思います。他にも、不本意入学、無目的進学、高校での受験目的のみの学習などがなされていると考えています。

これは1つの学生のレポートです。こんなレポートをいっぱい持っているのですが、「高校生活のあらゆる場面で、高校間の学力における競争関係を感じました。」具体的に挙げるとするならば、毎回模試が行われるたびに、教室で先生が県内の他の学校の各科目の偏差値、得点率を、点数を比較するわけですね。模試の場合は全ての学校の点数を持っているわけですから、他の学校の進度を授業内で言う。「あの学校では、今、この単元まで行っているぞ」というようなことを言うわけですね。そういうことをされていたと、教育学部のある男子学生は言っています。こういうレポートがたくさんあります。

入試センター試験の前に、共通一次というのがありました。その後にセンター試験になりました。この試験が始まってから今年で36年目ですが、この試験が36年の年月をかけて日本の高校教育を変貌させてきたと私は考えています。後の佐々木先生のお話ではありますが、ずっと1つの

スタイルで進んでいるわけではなくて、センター試験も少しずつ変わってきていますし、私立が参加してくるとか、いろいろな変化があるのですが、36年で、全体で変化させてきたのではないかと、私は思っています。

まず、センター試験前の出題の傾向といいますと、各大学がそれぞれ入試問題を作成していました。各大学・学部で個性的な問題が出題されていて、中には難問・奇問・珍問がありました。従って、受験対策としては、「この内容が出題される、この内容はこういう形で出題される」という予測が不可能、あるいは著しく困難でした。何が出ても対応できるような応用力を付けておく必要があったわけです。

ところが、センター試験後になりますと、出題の傾向は、入試センターが問題を作るので、難問・奇問を避けて、一般的で妥当な問題を出題します。妥当性は非常に高く、出題の傾向が決まってくる、客観的なものになりますね。受験対策としては、「センター試験にはこの内容が出題され、その場合、こういう形で出題される」という予測が可能、あるいは容易な出題になります。そこでは、多様な出題に対応できるような基本的な力と応用力よりも、センター試験対応の解答力が求められる。そのため、高校では、そういった解答力を付ける授業と、その詰め込みが中心になります。

私が校長をしていた時の話です、附属学校では教育実習をやります。教育実習をやるのは、母校実習といって、附属学校の卒業生で大学生になっている者と、名古屋大学の学生で母校に帰って実習ができない人です。その中のどこかの県の県立高校から名古屋大学に入った学生が、教育実習のときに、最後の反省会で、「自分が高校のときにやった勉強は、この学校の教育で教育実習を教師としてするときに何の役にも立たなかった」と言った子がいます。「なぜなら、自分が高校のときの学習は、記憶と想起であり、この附属学校は、教科の本質を協同で探究するような協同探究学習をやっている。だから自分の経験は役立たなかった」と、悔しそうに、かつ悲しそうに話していました。

そういう高校教育では、結果として、「大学に入るための学力」は身に付けるけれども、「大学に入ってから通用する学力」は身に付いていません。しかし「大学に入るための学力」は、大学に入るといらなくなってしまうので、すぐ忘れます。学生のレポートの中にいろいろなものがありますけれども、ある女子学生がこういうことを書いてくれました。「自分は日本史が大好きで、得意科目だった。みんな自分に日本史のことを聞きに来た。年号なんか、何でもかんでも言えた。そして名古屋大学の学生になった。ある日、日本史を勉強している妹が、自分に日本史の質問をした。ところが、そのときに何も答えられなかった。要するに、入学したら全部忘れてしまっていた。」

受験のための知識というのは、構造化されていないのですね。受験のためだけに構造化されていて、日本史の原理、歴史の原理、日本の文化の原理によって構成されているわけではないので、生きたつながりを持っていないですね。だから、そんなものは、積み木を積むように積んでいるだけですから、すぐ忘れてしまう。本人はすごくびっくりしたようですが、そういう知識です。

また、人間としての基本的な感受性や、共感性、表現力、コミュニケーション力が育っていないと思います。

もう1つ、センター試験によって、大学のランキングが大きく変わりました。これは、ランク

が上がったり下がったりするという意味ではありません。ランキングというものの自体が変わったのだと思います。

センター試験前は、学部ごと、あるいは専攻ごとの序列のようなものはありましたが、全ての大学の、全ての学部を共通に測る物差しは存在しませんでした。例えば、われわれのころは、法学部だとここが1番、2番目はここ、3番目はここというような序列は確かにありました。けれども、ここの大学の法学部が何番目で、次に来るのがここの大学の経済学部だというような序列を言う人は、あまりいなかったのです。その結果、いくつかの大学の同じ学部、同じ専攻を受験することはあっても、いくつかの大学で異なる学部・専攻を受験することはありませんでした。ところが、これが変わってきます。

センター試験によって、全ての大学の全ての学部を共通に測る物差しが出現します。これはもちろん、各大学・学部で必要とする教科が違ってきますので、完全に同じように測れるわけではありませんが、ほぼ同じです。予備校などが発表した、合格可能なセンター試験の点数に基づいて、最終的な出願先を受験生が決めます。ですから、この試験で測っているわけです。

その序列の中で少しでも上位の学部の合格者を出すことで実績を上げるという高校間の熾烈な競争関係が生じて、各高校はそこに投げ込まれていくわけです。つまり、A大学の経済学部よりもB大学の法学部のほうの序列が高ければ、A大学の経済学部には自分の生徒を入れないで、B大学の法学部、つまり序列の上のほうの学部には生徒を押し込もうとします。そうしないと、その高校の進学実績というのは落ちたことになります。そのため、受験生に対して、合格しそうな最もランクの高い、複数の異なる専攻・学部を受験させる受験指導が横行するようになりました。C大学法学部とD大学教育学部ということですね。入りたい大学よりも、入れる最もレベルの高い大学へ押し込む受験指導をします。こういう受験指導をされたというレポートも、たくさん私は持っています。

20年ぐらい前にセンター試験が始まりましたが、それまでなかったような受験をする生徒が出てくるようになりました。例えば、愛知教育大学と名古屋大学の教育学部を受けるというようなことはありましたが、全く違う学部を受けているのです。ただ、センターの点で見ると近いのです。だから、専門としては違うけれども、受かりそうなところを受けている。一体この子はどちらがやりたいのか分からない。複数出願できますので、もう1つどこに出願しているかということが全部こちらは分かります。それを見ると、あるときから不思議な出願が始まる。それがこれです。このことによって、大学への不本意進学、無目的進学が増大していきます。

これは中学校や小学校の教育へも波及効果を持っていて、中学校は義務教育ですから、本当はこういうことに影響されるべきではないのですが、高校の中でも最も進学率の高い高校へ入学することが、本人や保護者の一番の目的になります。そのため、点の取れる学習のための塾通いが格段に増えてきます。小学校にもその影響が下りてきます。ですから、通塾率が非常に上がってきます。

塾通いによって失われるものもあります。例えば、子ども同士だと、同年代の子ども同士で遊ぶ体験、特に集団で遊ぶ体験がありません。子ども同士のコンフリクト（葛藤）とその克服。例えば、広場で野球をしているときに、アウトだったのか、セーフだったのかみたいなことは、子どもにとって非常に大事なのですが、そこをどうするかですね。今のは、ちょっとアウトくさい

セーフなんじゃないか、じゃあセーフにしよう、でも、次、セーフくさいアウトのときはアウトにしようとか、そういう交渉があるわけですが、そういうことをしなくなる。Aちゃんは何曜日にどこの塾へ行っていて、Bちゃんは何曜日にどこへおけいこに行っていてと、それぞれがその余りの分断された時間を多少持っていますが、共通の時間はありませんので、子ども同士でそういう葛藤を克服するということはなくなっていくます。

家庭内では、家族の対話がなくなります。子どもは塾へ行ってしまうから、家族の価値観の共有、世代間コミュニケーション、種々の体験の共有、家庭内のコンフリクトとその克服というものも減少していきます。

中等教育時期の能力の発達

もう1つ重要な点があると思うのです。それは、中等教育の「時期」とは発達にとってどういう時期なのかということを見つめる必要があるということです。先年なくなりましたが、カリフォルニア大学の図書館長で、Peter Lymanという先生がいらっしゃいました。パークレー校の教授です。情報学の教授で、図書館長もしていましたが、情報工学ではなく社会情報学のようなことをなさっている方でした。カリフォルニア大学というのは、ご存じだと思いますが、Berkeley、Davis、Irvine、Los Angeles、Merced、Riverside、San Diego、San Francisco、Santa Barbara、Santa Cruzの7つのキャンパスを持っている大規模な州立大学です。その図書館は全米で最も情報化されていると、昔からいられています。要するに、コンピュータ化されているわけです。

カリフォルニア大学図書館はどれぐらい大きいかということですが、7校のうちのパークレー校だけで、蔵書は1,000万冊、日本語の本だけで20万冊。カリフォルニア大学全体では、おそらく数千万冊以上。名古屋大学は、全館合計で330万冊。パークレー校1校にもかなわない。どれだけ大きな図書館か、お分かりになると思います。

この図書館長だったPeter Lyman先生が、デジタル時代の図書館について講演をしました。その講演をしたときに、フロアから質問がありました。「あなたのデジタル図書館で職員として採用する人は、どんな能力を備えていなければなりませんか」。教授はどう答えたか思い出になりますか。実は、これを名古屋大学の前の図書館長であった伊藤義人先生に聞いたら、見事にほぼ同じ答えをなさいましたので、敬服しましたけれども、教授はこう答えました。「独創力と自己主導性があるって、問題発見能力と問題解決能力を持っている人です」。

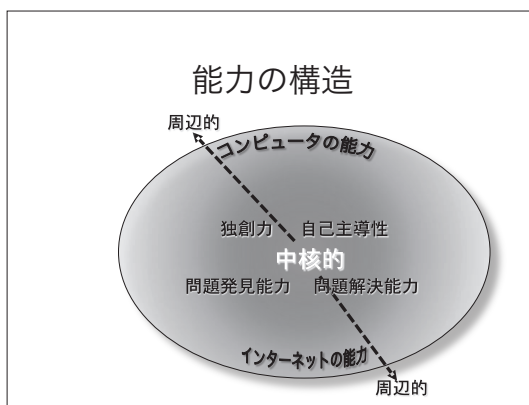
これについて私が考えますのは、独創力というのは、自分独自の考えを持てることです。人がどう言おうと、自分独自の考えを持つ。自己主導性は、自分で勉強や仕事を進められること。問題発見能力は、「何かおかしい!」「これは問題だ!」「これは解決したほうがいい!」と気づくこと。問題解決能力は、それを解決することができることです。そうすると同じ質問者が再び質問しました。「あなたの大学の図書館は、全米で最も情報化された図書館ですよね。そのために例えば、コンピュータに関する能力が必要なのではないですか。だから私が聞きたいのは、コンピュータに関する能力なのです。データベースの管理ができないといけません。コンピュータのプログラミングができないといけません。それともインターネットのページが見られるぐらい、メールが使えるぐらいでいいのですか」そういうことを聞きました。

そうしたら、教授は再度答えました。「私の図書館で採用する人に、コンピュータに関する能力など要求しません。なぜなら、そのような能力は、その人を採用した後でいくらでも身に付けることができるからです。しかし、私が今挙げたこれらの能力がなければ、私の図書館でする仕事はありません」。

構造的な能力観

この物語から学ぶべきことがあると思うのです。いつも3つなのですが、今日は高大接続に関して、2つに絞っています。1つ目は、構造的な能力観の必要。2つ目は、能力を身に付けることのできる時期の認識。これは、先ほども言いました臨界期ですね。

構造的な能力観は、「中核的な能力」と、その周辺に位置づく「周辺的な能力」に分けて考えるべきではないでしょうか。中核的な能力が周辺的な能力を使うのであって、決してその逆ではありません。「情報活用能力」は周辺的な能力であって、Lyman先生が挙げた独創力、自己主導性、問題発見・問題解決能力こそが中核的な能力だということです。受験学力は、周辺的な能力だろうと、私は考えています。周辺的な能力の中の最たるものであろうと。



構造はこのような感じです。中核的な能力があって、周辺的な能力がある。構造的に捉えたときに、周辺的な能力はすぐ付けられるのですが、中核的な能力はすぐには付かないのです。その人の成長とともに付けなければいけない。中核的な能力は、採用してからでは付けられない。それを持っている人を採用するしかない。周辺的な能力は、採用してから付けますよということだと思うのです。そうだとすると、今の中等教育は、中核的な能力を付けなければならない大切な期間を、周辺的な能力を付けるために犠牲にしているのではないかと、私は考えるわけです。

「進路保証」の意味とは

「錦の御旗」とよく言いますが、高校教師が受験学力育成に特化した教育をやるときの錦の御旗が、「進路保証」という言葉です。とにかく、この子たちに進路保証してあげなければいけないのだから、受験学力を付けるのだと言うのです。たぶん、「進路保証」という言葉には、仕方がないのだと、自分を納得させる意味があるのだと思うのです。今この子たちを進学させることが問題なので、とにかくそれをやるのだ、仕方がないのだと。

つまり、「進路保証」という言葉は、教師にとって免罪符でもあるのです。ただ、免罪符は、罪を犯した者の心の慰めにはなっても、その罪の対象となった者は救ってくれないわけです。その罪の対象になった者、つまり高校生ですよ。高校生たちを免罪符は救ってくれないわけです。ですから、大学に入学してから、たくさん問題をその生徒たちは抱えるようになります。さっき言ったようなコピペぐらいならまだしも、大学に通えなくなる、人間関係が形成できなくなる、さまざまな問題があります。

こういったことが、現在の中高等教育が抱えている問題の1つであらうと思いますし、それが非常に深刻だと私は考えております。保護者の方や高校の関係の先生方がたくさんいらっしゃるの、お話ししたいと思いました。以上です。